

肺炎球菌ってなに？感染するとどうなるの？

肺炎球菌は、多くの子どもの鼻やのどにいる、身近な菌です。ふだんはおとなしくしていますが、子どもの体力や抵抗力が落ちた時などに、いつもは菌がいないところに入り込んで、いろいろな病気（感染症）を引き起こします。

肺炎球菌が起こす病気

細菌性髄膜炎

脳や脊髄をおおっている髄膜に菌が侵入して炎症を起こす。日本では、毎年約200人の子どもの肺炎球菌による髄膜炎にかかり、うち1/3くらいが、命を奪われたり、重い障害が残ったりしている。

菌血症

血液の中に菌が入り込むこと。放っておくと、血液中の菌がいろいろな臓器にうつり、髄膜炎など重い病気を引き起こす心配がある。



肺炎

肺炎球菌という名の通り、肺炎の原因になる。症状が重く、入院が必要になることもある。

中耳炎

カゼなどで抵抗力が落ちた時に、耳の奥に感染し、炎症を起こす。肺炎球菌が原因の中耳炎は、何度も繰り返し、治りにくいことがある。

このほかにも、副鼻腔炎、骨髄炎、関節炎なども肺炎球菌によって起こります。

肺炎球菌について詳しくはこちら <http://www.haienkyukin.jp>

小児用肺炎球菌ワクチンってどんなもの？

細菌性髄膜炎など、肺炎球菌による重い感染症を予防する、子ども用のワクチンです。

予防できる病気

肺炎球菌による髄膜炎や菌血症、菌血症を伴う肺炎など。これらの病気を予防するために接種します。

接種する時期

生後2か月以上から9歳以下まで接種できます。肺炎球菌による髄膜炎は約半数が0歳代でかかり、それ以降は年齢とともに少なくなりますが、5歳くらいまでは危険年齢です（5歳を過ぎての発症もあります）。2か月になったらなるべく早く接種しましょう。

効果

2000年から定期接種にしているアメリカでは、ワクチンで予防できる肺炎球菌による重い感染症が98%減りました。現在、世界の約100か国で接種され、うち43か国では定期接種されています。



副反応と安全性

ワクチンを接種した後に、発熱や接種部分の腫れなどの副反応が起こる頻度は、ほかのワクチンと同じ程度です。10年前に発売されて以来、世界中の子どもたちに接種されています。

小児用肺炎球菌ワクチンについて詳しくはこちら <http://www.prevenar.jp>